

日本語文献におけるカライ派ユダヤ教の位置付け —— アラブ・イスラーム世界におけるユダヤ教の〈正統〉——

菅野和也 ソロモン

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿は日本のユダヤ研究における新しい研究領域を提示し、その研究対象を従来とは別の角度から紹介することを目的とする。本稿が着目するカライ派ユダヤ教を主題とした研究は、世界的にも少なく、日本では未開拓の領域である。そのためカライ派研究を志す上で必要不可欠となる予備調査として、日本語で出版されているユダヤ関連の書籍を分析し、同派がいかに位置付けられているのかを考察した。そして日本語文献に浮びあがるカライ派像のほとんどが〈正統〉に対抗する〈異端〉として否定的イメージを背負っていることを確認した。

本稿は、カライ派を〈異端〉として短略的に評価せず、別の角度から再考することを目指した。そこで政治思想家である丸山眞男が定義づけたL正統とO正統の区別を用いて、同派の立場を検討した。そして中世における多数派であったラビ・ユダヤ教に対抗した、もう一つの〈正統〉としてカライ派を位置付けた。こうした再検討を経て、カライ派と正面から向き合う準備ができ、ユダヤ教内部で同派が担った位置をより正確に描写できるのである。

はじめに

カライ派ユダヤ教（以下、カライ派）とは、中世アラブ・イスラーム世界において繁栄したユダヤ教の一派である。その起源については、カライ派賢者たちの歴史記述にも諸説あり、学術的な精査に耐えうるような証拠は提出されておらず、今後も断定されないだろう。それは同派の中心的活動形態が時代とともに変容したために、カライ派をひとことで表現することが困難だからである¹⁾。

カライ派は派閥として一括りにし難いが、同派の発展に寄与した人々の思想は、ユダヤ教の聖典であるミクラ―つまり TaNaKh (Ta: トーラー／律法, Na: ネビイーム, Kh: ケトゥビーム／諸書) を重視した点で概ね一致していた。それは **בני מקרא** Qara'im (読むものたち), **בני מקרא** Benei Miqra (聖典の子孫), **בעלי מקרא** Ba'alei Miqra (聖典の精通者) といった色々な別称にお

いて, **קרא** (聖典の学びの意) が共通する語根であることから分かる²⁾。そして聖典を重視する特徴は、カライ派の創始者アナン・ベン・ダヴィッドの言葉として度々引用される「トーラー(聖書)をよく探究せよ、そして私の知識を頼みとする **נא חפשו בתורה שפיר ואל תשענו על דעת**」³⁾ という文言によく現れている。

カライ派が形成されたのは、口承伝承による教えを編纂したバビロニア・タルムードの完成(5世紀末)に伴って、ユダヤ共同体の指導者であるラビたちの権威が各地に広まり、その地位が確立されていく時代であった。タルムードに編纂されたのは、歴代のラビたちによるミドラシュ(聖書解釈)、ミシュナ(聖書註解)、ユダヤ賢者のハラハー(法規)の解釈や議論、ユダヤのアガダー(伝説や逸話)などである。口伝律法として代々受け継がれたものが、書物になって以降、各地の学塾で教科書として受容された。こうした口伝律法を基礎にしたラビたちの権威に対抗したカライ

派は、聖典への回帰を主張したのであった⁴⁾。

口伝律法を否定したカライ派は、ラビたちを権威とするラビ・ユダヤ教から論敵と見なされ、反正統派もしくは〈異端〉の烙印を押されたのである。カライ派に〈異端〉のレッテルを貼ったのは、自分たちこそ正統だと主張するラビ・ユダヤ教の消極的な動機によるもの⁵⁾である。そうしたレッテルはカライ派をよく知ろうとする上で障壁となる。

本稿はまず第1節で、ユダヤ関連の日本語出版物に見られるカライ派像を分析する。つづく第2節では政治思想家丸山眞男が、江戸儒学界に登場した閩齋学派の分析で用いた〈正統〉の2つのカテゴリー（L正統とO正統）を援用することで、カライ派を再評価する。本稿の目的は、従来のカライ派像を再考することで、カライ派研究の発展の可能性を提示することにある。

第1節 カライ派に関する日本語での記述

学問としてのユダヤ研究が日本で確立しはじめたのは第2次世界大戦以降である。そのため日本語で刊行されている文書には、学術的な精査に基づかないものが多くある。世界を裏で牛耳る秘密組織を形成するユダヤ人として描く反ユダヤ主義、日本に失われた10部族の末裔がいると主張する日猶同祖論、大金持ちのエリートユダヤ人を模範に金儲けや教育の仕方を学ぼうとするお役立ち情報といった言説が流布している。本稿はこれらの書物を考慮しない。

本節ではユダヤ研究や聖書学に基礎を置いていると見られる、ユダヤ関連の概説書をレビューする。該当する概説書には、日本のユダヤ研究者もしくは聖書学者が日本語で記したものと、外国の研究者により執筆され、日本語に翻訳されたものが含まれる。留意点としては、そのほとんどが一般書であるために、研究書や論文の体裁で出版されていないことが挙げられる。またカライ派に言及しているもののみを分析するため、言及がない書物は考慮されない。さらに本節で取り上げるほとんどの文献が、カライ派に言及していても数行や数ページにしか及ばないことにも注意が必要で

ある。

取り扱う文献は以下の通りである。

—日本語原著—

1. 小辻誠祐『ユダヤ民族 —— その四千年の歩み ——』1965
2. 石田友雄『ユダヤ教史』1980
3. 滝川義人『ユダヤを知る事典』1994
4. ユダヤ大事典編纂委員会『ユダヤ大事典』2006
5. 市川裕『ユダヤ教の歴史』2009
6. 小岸昭「ハザール人」沼野充義編『ユダヤ学のすべて 新装版』2009
7. 嶋田英晴『ユダヤ教徒に見る生き残り戦略』2015
8. 勝又悦子・勝又直也共著『生きるユダヤ教 カタチにならないものの強さ』2016

—翻訳書—

9. ロス、シーセル『ユダヤ人の歴史』長谷川真・安積鋭二共訳、1966
10. ベンサソン、H・H『ユダヤ民族史3 中世篇I』村岡崇光訳、1977
11. シュラキ、アンドレ『ユダヤ教の歴史』増田治子訳、1993
12. デイモント、マックス『ユダヤ人の歴史』平野和子・河合一充共訳、1994
13. ラーンジュ、ニコラス・デ『ユダヤ教入門』柄谷凜訳、2002
14. ザハル、アブラム・レオン『ユダヤ人の歴史』滝川義人訳、2003
15. ソロモン、ノーマン『一冊でわかる ユダヤ教』山我哲雄訳、2003
16. ラーンジュ、ニコラス・デ『ユダヤ教とはなにか』柄谷凜訳、2004

1.1 日本語文献におけるカライ派の位置

上記の一覧のなかで最も古いのは小辻誠祐の『ユダヤ民族⁶⁾』で、「カライズム」と題した節において見開きで解説している。項目を立てた理由は「ユダヤ教徒間の議論に時々現れる用語であり、従ってこれを知らずしては意味の解釈に苦しむ場合もある」からである。小辻はカライ派の聖書に

対する姿勢から、同派をユダヤ教の復古的教派として位置付ける。そして「従来のタルムード主義から迷信を払拭してユダヤ教に哲学的思弁を導入した」が、聖書を直接的な法規とすることから、タルムード的ユダヤ教つまりラビ・ユダヤ教より窮屈なものとなったと評価している。しかし小辻の本音は「現在においてはほとんど勢力のないものであるから、余り多く語る必要もあるまい」が、「一応、ここに触れておく」という言葉に表れている。さらにタルムードがあってこそ「ユダヤ教の面目が躍如するのであるから」カライ派が「継子扱いにされるのは道理である」と言い切っている。このようにタルムードの権威を理由にカライ派を分派とする点において小辻は、ラビ・ユダヤ教の見解を引き継いでいる。

石田友雄は『ユダヤ教史⁷⁾』において、カライ派を8世紀後半のバビロニアで反正統派運動を起こしたセクトであると位置付ける。そして同派が聖書を唯一の権威とすることから、カライ派という名称は「聖書主義者⁸⁾」を意味すると解説する。石田によればカライ派は、ラビ・ユダヤ教の伝統の重荷を排除したが、柔軟な律法解釈と権威ある指導者が欠如していたために、民衆から支持されなかった。

滝川義人は『ユダヤを知る事典⁹⁾』で、「旧約聖書のみを信じるカライ派」として紹介する。滝川はカライ派がタルムードの伝統から枝分かれしたものであるとして「旧約聖書のみを信じ、タルムードに象徴されるユダヤ教本流の口承法を拒否」したと説明する。このことから滝川がタルムードをユダヤ教の本流と考えていたことが明らかである。また小辻や石田と同じくカライ派が厳しい戒律を自らに課していると記しているが、同派の教えについてそれ以上の記述はない。

『ユダヤ大事典¹⁰⁾』はカライ派を「ユダヤの他の宗派」であり8世紀後半にバビロニアで起きた「反正統派ユダヤ教セクト」として紹介する。石田の記述と同じく、カライ派は「聖書主義者」を意味すると説明する。同欄担当者の池田裕は15世紀のアドリアノーブルにいたカライ派の賢者エリヤフ・バシユアツィがまとめたカライ派の10の信条をリストで紹介する¹¹⁾。池田はカライ派が

その禁欲的傾向から、律法解釈に柔軟性を持たず、12世紀以降勢力が衰退したとする。ただしバシユアツィの活躍したのが15世紀であることを考慮すれば、規模が縮小されつつも同派が残存していたことは明らかである。

『ユダヤ学のすべて 新装版』において「ハザール人¹²⁾」の項を担当した小岸昭は、カライ派に言及する。ハザール人とは国王を筆頭に国をあげてユダヤ教を信じたとされる人々であるが、彼らがどのようなユダヤ教を信じていたかはいまだ議論が続いている。小岸はハザール人の信じたユダヤ教のカライ派起源説を説明する中で、「ラビ的ユダヤ教を退ける」存在としてカライ派を紹介する。聖書のみを受け入れる分かりやすい信仰と、原初の教えに戻ることを教える原理主義として簡潔に言及する。カライ派については単独の項目が立てられず、「ハザール人」の項で触れられており、周辺的な情報として提示されていると言える。

『ユダヤ教の歴史¹³⁾』において市川裕は、幾度かにわたりカライ派について言及する。まず8世紀のユダヤ社会の世俗的権威レーシュ・ガルータと宗教的権威ガオンのあいだで競合が生まれ、共同体内部が多様化していたと説明する。そのなかで「口伝トーラーの権威を否定し、成文トーラーのみを真正の啓示と認める異端の主張が出現した¹⁴⁾」ものとしてカライ派を紹介する。その背景には当時の支配勢力であったムスリム社会において、複数の法学派の存在が許容されていたことがあると説明する。そして10世紀にカライ派が勢力を拡大すると、ラビ・ユダヤ教側は破門宣告したが、効果が得られなかったために、ラビたちは哲学書で論駁し、大きな成果を上げたと解説する。ほかにはマイモニデスとして知られる12世紀のユダヤ神学者モシェ・ベン・マイモンがエジプトのカイロで「ユダヤ人社会の分裂をもたらす異端であった」カライ派の「誤謬に触発されて」合理主義的な聖書解釈を残したとしている¹⁵⁾。巻末の用語解説では「トーラーとタルムードの両方を権威とするラビ・ユダヤ教に対し、タルムードの権威をいっさい認めないユダヤ教分派の総称¹⁶⁾」として描写する。

本稿で取り扱う日本の研究者による著作のなか

で唯一研究書の体裁を採るのは、嶋田英晴の『ユダヤ教徒に見る生き残り戦略¹⁷⁾』である。嶋田は、イスラーム世界においてユダヤ共同体の宗教的指導者であるガオンや世俗の長であるレーシュ・ガルータの権威が衰退していた内的要因としてカラライ派の台頭を取り上げる。同派出現の背景として宗教的、政治的、経済的混乱をあげているが、「カラライ派は「モーセの律法」のみを権威と認め¹⁸⁾、それ以後ラビ・ユダヤ教が発展させた口伝律法（タルムード）の伝統を一切認めない点でラビ・ユダヤ教徒と袂を分かった」と説明する。アナン・ベン・ダヴィッドとカラライ派の連続性や、カラライ派内部の分裂、イスラームの合理的神学からの影響にも触れている。今後の課題として「カラライ派は（中略）異端と断定できるのであるか」と積極的な問いを提出しているが、これは日本におけるカラライ派研究がいかに遅れているかを表している。カラライ派の評価だけでなくラビ・ユダヤ教についても「トーラーの真の継承者であると断言することができない」と留保する姿勢は注目に値する。

最も新しいものでは勝又悦子・勝又直也の共著『生きるユダヤ教¹⁹⁾』にカラライ派への言及がある。同書は、バビロニア・タルムードの編纂終了とともにラビ・ユダヤ教が完成したが、完成と同時にイスラームによる外から、そしてカラライ派による内からの突き上げを受けることになったとする。カラライ派はタルムードに代表されるような口伝トーラーを否定し、「成文トーラーであるヘブライ語聖書の記述通りに実行することを求めた」としている。またカラライ派が現代にまで存続していることを指摘し、成文トーラーと口伝トーラーの二つを持つユダヤ教の「自己点検システム」として評価する。短い記述ではあるが、〈異端〉などの否定的な言葉は使用されていない。

以上のように見てくると、積極的に評価する記述が多少はあるものの、カラライ派に関する描写のほとんどに「継子」「反正統派運動」「本流の拒否」「反正統派ユダヤ教セクト」「異端」「分裂の原因」「誤謬」といった否定的な言葉が使用されているのが分かる。

1.2 日本語翻訳文献におけるカラライ派の位置

では外国の研究者による著作で日本語に翻訳された文献ではどうだろうか。

『ユダヤ人の歴史²⁰⁾』において英国生まれの歴史学者シーセル・ロスは、ラビたちが直面した最も緊急な課題としてカラライ派を取り上げる。ロスは、カラライ派の創始者とされるアナン・ベン・ダヴィッドが、ラビの権威を全部拒絶し、タルムードは人を欺くものであり、それに従う者は「間抜け者」だと嘲笑したと書く。他方でアナンが聖書の字義通りの解釈を神聖視し²¹⁾、厳しい戒律を制定したとする。またカラライ派に追従したのは、あまり学識がなく、ラビの細々とした議論を難しく思うが、いつも聖書を手に参考にしているものたちであったと解説する。ロスはカラライ派の衰退の理由として、ゲオニーム時代²²⁾のラビを代表するサアディア・ガオンをあげる。それはサアディアが残した聖書のアラビア語訳（タフシール）に見られるように、タルムードを支持するユダヤ人も聖典に詳しいことを示したからであった。ロスはカラライ派の追従者がエジプトやポーランド、クリミアに残っていたことには触れるが、サアディアの論駁によりラビ・ユダヤ教側が「完全な勝利をおさめていた」とする。

フランス系ユダヤ人のアンドレ・シュラキは『ユダヤ教の歴史²³⁾』でカラライ派の成立背景に、イスラームの出現による「精神的、知的、政治的、経済的」影響を受けたユダヤ人のなかに終末思想やメシアニズムを持った「幻想家」や、タルムードに対抗する「改革者」が出現したことをあげる。カラライ派はそうした教派運動が続くなかで強い組織を形成したとする。アナン・ベン・ダヴィッドが創立者とされ、彼によって「記述啓示の根源である聖書は、それ自体で自立しており、各人が自由に検討することによって、聖書の要求を解釈できる」という思想が生まれたと記す。「すべての人に、自分自身の光に照らして聖書を解釈する自由が残されていた」のである。その例として、聖地へ帰ることで「民を口伝律法の軛から解放し、その原典の純粹さにおいて民を復権させるはず」と期待していたダニエル・ベン・モシエ²⁴⁾が挙げられる。シュラキは、カラライ派がラビ・ユダヤ教

からの離脱と禁欲的神秘的实践による布教活動によって、ユダヤ教神学の活躍と聖書研究の復活をもたらしたと積極的に評価する。

フィンランド系アメリカ人のマックス・デモントは『ユダヤ人の歴史²⁵⁾』のなかで、ユダヤ史における異端の一つとしてカライ派に言及する。そして同派をタルムード主義に対して、聖書を重視する一派と定義する。同時にデモントはカライ派を「単なる異端ではなかった」と評価する。それは彼らが聖書の科学的な研究や、ヘブライ語を調べ、ユダヤ教の基礎を研究したからである。また10世紀のカライ派賢者たちがパレスチナへの即時帰還を説いた点に、20世紀のシオニストとの類似性を見出している。デモントによれば、口伝律法を拒否するカライ派の最大の危機は、ラビ・ユダヤ教ではなく、聖書を日常に適用するために独自の口伝律法を定める他ないという内的矛盾であった。

ケンブリッジ大学でヘブライ語とユダヤ学を教えたニコラス・デ・ラーンジュは『ユダヤ教入門²⁶⁾』で、カライ派がラビの伝統を拒否して、聖書を直接読むことを説くことで、ラビ・ユダヤ教に痛烈な挑戦を突きつけたとする。それというのも伝統的ラビ・ユダヤ教におけるタルムードが、聖書の権威を上回るようなこともあったのであるが、中世のカライ派運動はタルムードの権威を否定したからである²⁷⁾。またカライ派は、ラビ・ユダヤ教の敵対者として対立したユダヤ教の改革運動であったと解説される²⁸⁾。『ユダヤ教とはなにか²⁹⁾』においてラーンジュはカライ派を、ガオンたちの時代に起きたいくつかの異端的な宗教運動のなかで最も成功したものとする。またカライ派をラビの伝統とタルムードの権威に対して異議を申し立てたとし、聖書の解釈においてタルムードやラビといった権威に頼るべきではないとしたと解説する。彼は、時間の経過とともにカライ派も独自の伝統を生み出し、聖書と矛盾しないラビたちの意見も受け入れるようになっていたという変遷も記している。

英国のユダヤ研究者でありラビであるノーマン・ソロモンはオックスフォード大学出版局が手がける Very Short Introduction シリーズ『一冊で

わかる ユダヤ教³⁰⁾』のなかで、中世にあって繁栄した唯一の異論としてカライ派に言及する。ノーマンは、カライ派が「[ラッパン]のユダヤ教の方を「セクト」と見なし、自分たちの宗教こそ真正で元来のユダヤ教徒であると考えた」とする。

アメリカのユダヤ系移民2世であるアブラム・レオン・ザハルは著書『ユダヤ人の歴史³¹⁾』のなかで「タルムードに対する反発」という節を設け、8世紀にその権威が確立したタルムードに対する3つの挑戦を取り上げる。そして、アナンに始まるカライ派の運動を一番大きなものとして紹介する。アナンの思想については残された文献の少なさから一定の留保を見せるものの、「聖書をユダヤ人の生活における至上の権威として受け入れ、タルムードの伝統を徹底して否定したのは明らかである」とした。またアナンの「聖書を精読し、私の解釈に頼るな」³²⁾という言葉から、カライ派が正統や非正統の区別を持たず、各々の共同体が「それぞれの光で聖書を解釈し、規則をつくった」と述べている。しかしこうした個人主義的特徴によりカライ派は、その思想を体系付ける運動もむなしく、サアディア・ガオンの反駁に対抗できず、勢力を縮小していくことになったとする。運動は失敗したが、聖書の至上性を訴えたカライ派は、ユダヤ教の世界において「ヘブライ語研究」や「ヘブライ哲学の分野」を大いに促進する存在であったと評価する。またタルムードを基礎に置くユダヤ教の老化や硬直化を防ぐ契機になり、聖書解釈の行き過ぎは有害になることをラビたちに再認識させたとする。ザハルのカライ派への評価はサアディア・ガオンに関する記述にも表れている。タルムードを擁護しカライ派を撃退したことで知られるサアディアが、カライ派の例にならい、聖書をアラビア語に翻訳し、註解を付し、辞書を作成したとしている。

日本語で読める文献のうち、カライ派に最も長く言及するのは、H・H・ベンサソンの『ユダヤ民族史3 中世篇 I³³⁾』である。その特徴はカライ派が残した文献を引用しながら論じる点にある。まずアナン・ベン・ダヴィッドの『戒律の書』を「一匹狼のタルムード学者が定説に抗して書いた

自家製タルムード」であると評価する。またアナンは自身の律法解釈のみを権威として主張したとし、ヘブライ語聖書のみを經典とし、文字通りの意味のみを受容するようなカライ派ではなかったとする。こうした理解は「律法をつぶさに調べ、私の意見に頼るな」³⁴⁾ という文言がアナンの教えとして誤って受容されてきたという指摘にも表れている。そして、聖書主義的な意味でのカライ派の出現は10世紀のことであるとする。ベンサソンはカライ派の歴史家ヤアコブ・アル=キルキサーニに言及して、カライ派内部には彼らの合理主義的個人主義の傾向から「多種多様な意見や慣習が行われていた」と指摘する。そうした違いは「正統派ラビたちが、神学校の権威とタルムードに盾突く者に十把一からげにカライ派の烙印を押した」ことで一括りにされたと説明する。

また10世紀のエルサレムで活動し「ツィオンを嘆く者の群」と名乗った禁欲主義的、個人主義的、合理主義的なカライ派の思想家たちにも言及する。彼らは「個人は自己の理性に頼って聖書を独自に理解する義務を負っている」という理解のもとで「註解、論争、歴史的著作などに勢力的に取り組んだ」とされる。こうした個人主義的な理想が表出しているものとして、ツァハル・ベン・マツリーアッハがラビたちに宛てた公開状を引用する。公開状は、先達の指導がいかようであったからという言い訳は神に受け入れられないから、常に聖書の言葉に照らして検証する必要があると主張する。そして「律法の戒律の真の姿に到達するまで探し求めるとしよう」と説き、「学び、求め、きわめ、調べ、明白な知性によって確立され、自分の見解となったところを実践せよ」と推奨する。

またペルシアで活動したダニエル・アル=クームスィ³⁵⁾を取り上げて、彼がアナンをカライ派の創始者であるとせずに「後の者が真理を発見する」と主張していたことに言及する。またその著書『十二預言書註解』を引用して、アル=クームスィがディアスポラの時代を神殿時代と違って「律法に関する知識がすべての人々の間にあまねくひろまる時代」として認識していたと指摘する。だがベンサソンによれば、知識の増加が個々人の

律法の戒律に対する責任を重くしたということである。

ベンサソンはカライ派の衰退の原因が「サアディアの鋭い攻撃ではなく、それが提唱する生活様式」つまり禁欲主義的、個人主義的、合理主義的な生活にあり、大多数のユダヤ人はラビたちによる統一的な指導を歓迎したのだと説明する。

さて第1節第1項では日本語で書かれたものを、本項では日本語に翻訳された外国語の文献をレビューした。どちらにおいてもカライ派を〈異端〉、ラビ・ユダヤ教を〈正統派〉とする傾向はある。しかし前者と比較して後者には、カライ派を積極的に評価する記述も見られた。それは聖書研究やヘブライ語研究の復興の契機となり、またラビ・ユダヤ教が伝統に固執し硬直化を防ぐ刺激となったといった指摘である。ただし双方ともラビ・ユダヤ教に関する記述に対して、カライ派への言及が圧倒的に少ない点で共通している。カライ派が研究の中心に据えられていないことは、カライ派がユダヤ研究においてあまり重要視されていないことを暗示しているともいえる。

第2節 アラブ・イスラーム世界におけるユダヤ教の正統

第2節では、政治思想家である丸山眞男が、江戸時代の儒学界における特異点である闇齋学派に関する著述のなかで提示した〈L正統〉と〈O正統〉の区別を転用して、アラブ・イスラーム世界におけるカライ派とラビ・ユダヤ教の相互関係について考察する。本節第1項では丸山による正統の分析に簡潔に触れ、第2項ではその枠組みをユダヤ教の文脈に適用する。〈L正統〉と〈O正統〉というラベルを用いてカライ派を吟味することが的外れでないことは、丸山自身が2つの正統は「東西古今のさまざまな宗教・教義・世界観において様々の態様で絡み合ってきた³⁶⁾」としてキリスト教やイスラームに言及する点から裏付けられる³⁷⁾。

2.1 L正統とO正統

山崎闇齋を起点とし、江戸儒学の一派として活

動した闇斎学派は、丸山が「学問の道德というよりは、むしろ秘伝の口授相伝を伝統とする教義神道にふさわしい³⁸⁾」と称するような師弟関係のうちに綿々と受け継がれ、他の朱子学者たちのあいだでも奇異な存在とされていた。ここで闇斎学派を詳細に検討することはしない。だが閉じられた師弟関係のなかで連綿と受け継がれた闇斎学派が〈偏狭的〉〈閉鎖的〉〈排他的〉といった固定化した印象を抱かれていたという指摘は重要である。そうした固定概念が生み出されたのは「学説の内容といった込み入った次元でよりは、ヨリ容易に認知できる「学風」とか、行動様式の次元で一般化するのがいつの世でも通例³⁹⁾」であるからと丸山は説明する。これは第1節で取り上げた文献で語られるカライ派に対する否定的なイメージにも重なる。そこではカライ派について詳細な検討はなされず、表層的な部分が取り上げられ、分かりやすさが優先されている。

秘伝による連続性は、首尾一貫したイメージを生み出すのであるが、丸山は学派の内部は複雑な様相を見せていたとして以下のように記述する。「実際に、崎門派を、江戸時代の他の程朱学派からさえ自他ともに区別し、別格に位置づけるほどの完結性と連続性も、一步その内面に立ち入って具体的様相をみると「一枚岩」どころか、むしろ団結のルーズな他の学派よりもはるかにげいしい緊張と対立が同門に渦巻いている光景が立ち現れる⁴⁰⁾」と。

ところで丸山は闇斎学派の外側との対立と、内側での緊張を説明するものとして、2つの正統〈L正統〉と〈O正統〉を区別する⁴¹⁾。L正統とは「統治者又は統治体系を主体とする正統論議」つまり支配の Legitimacy に関する問題であり、O正統とは「教義・世界観を中核とするオーソドクシー問題」つまりイデオロギーの Orthodoxy の問題のことである。簡潔に述べるならば、前者は系譜的な正統を、後者は教義的な正統を主張するものである。

たとえば2つの正統のせめぎ合いは、宗教改革におけるカトリシズムとプロテスタンティズムの対立に顕著である。ローマ・カトリック教会がイエスの弟子ペテロから垂直に受け継がれている教

皇権により正統を主張したのに対し、プロテスタントの思想家たちは聖書のみを権威として認め、教権の原理を否定したのである。その後、プロテスタント内部は百花斉放の時期に入り、教義に関する議論が盛んになった。その結果、現代にいたるまで内部分裂を繰り返しつつづけている。このときカトリシズムの正統は系譜によるL正統を、プロテスタンティズムの正統は、教義によるO正統を主張したといえるだろう。

さて次項では、このL正統とO正統の区別をもって、カライ派とラビ・ユダヤ教の論争を分析する。

2.2 カライ派とラビ・ユダヤ教論争を取り巻く正統

まずカライ派が形成された時代背景にはアラブ・イスラーム勢力の支配がある。アナン・ベン・ダヴィッドが活動した8世紀には、イスラームの聖戦（ジハード）による支配の拡大があった。それはまたカリフ権を巡りイスラーム内部でスンナ派とシーア派が対立していた時代であり、アラブ至上主義的ウマイヤ朝を打破したアッバース朝がイスラームによる帝国の統一を図った時代でもあった。こうした権威所在が変動する不安定な社会情勢が、カライ派出現の背景にあった。また聖典クルアーンやムハンマドの言行録ハディースをもとにして、どのようなイスラーム法を採用するかが検討された時代でもあった。ここにイスラームにおけるL正統とO正統のせめぎ合いがあった。

L正統の問題では、ムハンマドの正式な継承者であるカリフ（アラビア語で後継者の意）は誰であるかが問われた。カリフはイスラーム共同体の合意により選出されることになっていたが、シーア派やウマイヤ朝の出現にみられるように、血統によるカリフ選出を主張した派閥もあった。O正統の問題においては、ムスリム（イスラーム信者）が従うべきスンナ（慣行）は何であるかが議論された。様々なハディースが編纂されたなかで、なにをスンナの典拠にするかが問題となった。現代の新しい潮流のなかには、クルアーン以外の教典を聖典として受け入れないクルアーン主義者と

呼ばれるものたちもいる⁴²⁾。

カライ派出現の背景は、第1節で取り上げた文献を含め、概ね以下のように説明される。アナ・ベン・ダヴィッドは、ユダヤ共同体の世俗的権威レーシュ・ガルータ（捕囚民の長）の家系に生まれたのに、その異端的思想を危惧した共同体の指導者たちに排斥され、代わって弟がその地位を継承することになった。それに憤慨したアナが、宗教的指導者であるラビたちに楯突いたことに端を発し、カライ派が出現したとされる。これは垂直的な権威継承がなされるラビやレーシュ・ガルータの権威への対抗である。言い換えるならば、L正統であるラビの権威への挑戦として理解される。

一方でラビの権威の排斥というL正統への挑戦があるのに対して、カライ派にはもう一つの側面がある。それが *scripturalist*（聖典主義）としての姿である。ラビの権威への反抗は、同時にその権威形成の土台となったタルムードへの批判的姿勢に繋がる。その争点となるのは日常における律法解釈の拠り所についてである。カライ派研究者ダニエル・フランクによれば、カライ派は律法解釈を聖書に基づいて行うことを、ラビ・ユダヤ教はタルムードとして編纂された賢者たちの口承伝統に基づいて行うことを主張したのである⁴³⁾。こうした聖典解釈を巡る対立をO正統と見ることができよう。まさに丸山が教義や世界観を論点とした〈オーソドクシーの問題〉である。

こうしてカライ派のラビ権威への反抗と聖典主義という2つの側面を、それぞれL正統とO正統の問題として位置づけることで、カライ派を短略的な〈異端〉というレッテルから解放し、カライ派とラビ・ユダヤ教のあいだにあった現実の議論に目を向けることが可能になるのではないだろうか。また丸山が闇斎学派と呼ばれる集団が一枚岩ではなく、そこにはむしろ緊張と対立が渦巻いていたと指摘したような多様性が、カライ派内部にも見られることが近年のカライ派研究の進展とともに明らかになりつつある⁴⁴⁾。

おわりに

さて本稿では日本語文献におけるカライ派の記述をレビューし、そこに描き出されるカライ派像が積極的な記述も見受けられるものの、ほとんどが〈正統派〉に対する〈異端〉という図式で語られていることを明らかにした。そこで〈異端〉というネガティブなイメージを払拭し、より積極的な研究をはじめめるために、丸山眞男が提示した〈L正統〉と〈O正統〉の区別を援用し、カライ派の主義主張を分類することを提案した。そうすることで絡み合っている二つの議論をひとまず整理することができたと考える。

言及しておかなければならないのは、先行研究におけるカライ派への言及の少なさが、研究者たちの怠慢によるものではないということだ。ラビ・ユダヤ教の伝統であるタルムードは膨大な議論を内包するものであり、それを研究すること自体、時間と労力のかかることであるからだ。また近年まではカライ派文献（カライ派が残した文献）へのアクセスが極端に制限されていたことも原因のひとつである。こうした史料の欠如は、19世紀にカライ派の愛書家アブラハム・フィルコヴィチチから、サンクトペテルブルクの帝国公共図書館（現ロシア国立図書館）に売却された史料が、ソヴィエト連邦崩壊後に公開され始めたことをきっかけに、解消されつつある。カライ派の実態をより詳細に明らかにするためには、残されたカライ派文献群の解読が必須の作業となる。

こうした史料を基礎にカライ派の実態や思想を探究することで、カライ派とラビ・ユダヤ教のあいだの論点をより詳細に明らかにすることができると考えられる。またカライ派研究はカライ派の実態を明らかにすることに留まらず、翻ってラビ・ユダヤ教におけるタルムード伝統の輪郭をはっきりとさせる可能性も含んでいる。

注

- 1) テルアビブ大学の聖書学教授 Meira Polliack は編著 *Karaite Judaism* へのまえがきで、カライ派研究の射程範囲の時代的、地理的広がりゆえに、

- カライ派を定義しようとするいかなる試みも、ほとんど確実に不十分であると述べている。 xvii 頁。
- 2) Geoffrey Khan の以下の著作を参照。 *The Early Karaite Tradition of Hebrew Grammatical Thought*. 3 頁。
 - 3) カライ派の聖書註解者イエフェット・ベン・エリイが、アナンの言葉としてゼカリヤ書の註解のなかで引用した、イエフェットはゼカリヤ書 5 章 8 節の「これは罪悪である」という文言が、ミシュナやタルムードを編纂したラビたちを指して使われていると解説する。それというのも聖書を解釈するうえでラビたちが、代々の言い伝え（ミシュナやタルムード）を頼りにし、自分たちで聖書を探究することがなかったためとする。聖書を重要視したカライ派に属するイエフェットは、アナンの言葉を引用して、聖書を自ら探究する大切さを説く。写本は以下を参照、Yefet ben 'Eli. *Commentary on Zechariah*. British Library, Oriental Collection, 2401. fol. 174b-175a.
 - 4) Meira Polliack は “Rethinking Karaism” と題した論考のなかで、タルムードが口伝であったところから編集され成文化され、ガオンの宗教的権力として確立の一助となったことが、ユダヤ教の解釈学的伝統の繊細なバランスを崩し、痛烈な反対意見を生み出したと説明している。 92-93 頁。
 - 5) 第 1 節第 2 項で紹介する H・H・ベンサソンは、ラビ・ユダヤ教がその権威に反対し、タルムードに盾突いた全ての運動に、カライ派というラベリングをしたと説明する。『ユダヤ民族史 3 中世篇 I』 115 頁。
 - 6) 小辻誠祐『ユダヤ民族 —— その四千年の歩み ——』 174-175 頁。
 - 7) 石田友雄『ユダヤ教史』 272-274 頁。
 - 8) カライ派の名称とその意味を巡る議論は、現在進行形の課題である。ただしヘブライ語の קראים Qara'im に主義や主張といった意味合いは含まれていない。
 - 9) 滝川義人『ユダヤを知る事典』 189-191 頁。
 - 10) 池田裕「ユダヤの他の宗派にはどのようなものがあるか」ユダヤ大事典編纂委員会『ユダヤ大事典』 132 頁。
 - 11) 『ユダヤ大事典』ではエリヤフ・バシュヤツィに言及されることがなく、カライ派の信条として羅列されるのみである。
 - 12) 小岸昭「ハザール人」沼野充義編『ユダヤ学のすべて 新装版』, 56-57 頁。
 - 13) 市川裕『ユダヤ教の歴史』。
 - 14) 同上, 67 頁。
 - 15) 同上, 82-88 頁。
 - 16) 同上, 用語解説, 3 頁。
 - 17) 嶋田英晴『ユダヤ教徒に見る生き残り戦略』 56-57 頁。
 - 18) カライ派ではモーセの律法のみが権威とされていたとは言い難い。それはモーセ五書として知られるトーラー以外に聖典化されているネビーム（預言書）やケトゥブーム（諸書）への註解が、カライ派文献の一つのジャンルとなっていることから明らかである。
 - 19) 勝又悦子・勝又直也共著『生きるユダヤ教 カタチにならないものの強さ』 138-139 頁。
 - 20) シーセル・ロス『ユダヤ人の歴史』 111-112 頁。
 - 21) アナナが著者とされる史料からは、彼自身が聖書の字義通りの解釈を神聖視していたかどうかは明らかになっていない。本稿冒頭で引用した「トーラー（聖書）をよく探究せよ、そして私の知識を頼みとするな」という文言のとおりアナナの主張は、先人たちの解釈に固執せずに、聖書を個々人が探究することであり、その方法については断定されていない。そのため聖書を各人が探究することと、聖書を字義通り解釈することは区別して考えられなければならない。カライ派において聖書の字義通りの解釈が重視されるようになるのは、後代のことである。詳しくは Polliack の以下の論文を参照。 “Major Trends in Karaite Biblical Exegesis in the Tenth and Eleventh Centuries.”
 - 22) 2 世紀以降のラビたちは時代ごとに分けられて呼称される。ガオン（高き者の意）がユダヤ共同体における宗教的権威を持った時代をゲオニーム（ガオンの複数形）と呼ぶ。これは西暦 589-1038 年にあたる。
 - 23) アンドレ・シュラキ『ユダヤ教の歴史』 69-70 頁。
 - 24) 注 35 のダニエル・アル=クームイスィと同じ人物。以下、参照。 Ben-Shammai, Haggai. “Daniel Al-Qūmisī.” *Encyclopaedia of Islam, Three*.
 - 25) マックス・デ・モンテ『ユダヤ人の歴史』 196-198 頁。
 - 26) ニコラス・デ・ラーンジュ『ユダヤ教入門』 60-61 頁。
 - 27) 同上, 81 頁。
 - 28) 同上, 98 頁。
 - 29) ニコラス・デ・ラーンジュ『ユダヤ教とはなにか』 56-57 頁。
 - 30) ノーマン・ソロモン『一冊でわかる ユダヤ教』 62 頁。
 - 31) アブラム・レオン・ザハル『ユダヤ人の歴史』 275-280 頁。
 - 32) 詳しくは、注 3 を参照。
 - 33) H・H・ベンサソン『ユダヤ民族史 3 中世篇 I』 103-106 頁, 114-120 頁。
 - 34) 詳しくは、注 3 を参照。
 - 35) 『ユダヤ民族史 3 中世篇 I』においては、ダニエル・アル・クームイスィと表記されているが、クームイスィのほうが原語の発音に近い。その名前のペルシャ北部（アルサケス朝パルティアの首都ヘカトンピュロスがあった地域）にあったクームス（کومس）州に由来すると考えられている。クームスがアラビア語に訛ってクームイスィ（قومس）となる。詳しくは以下参照。 “DANIEL BEN MOSES AL-QŪMISĪ.” *Encyclopaedia Judaica*.

- 36) 丸山真男「闇斎学と闇斎学派」西順蔵, 阿部隆一, 丸山真男校注『山崎闇斎学派 日本史相大系 31』620-621 頁.
- 37) 丸山の正統と異端に関する論述は, 注 36 の「闇斎学と闇斎学派」が主なものとなる. 丸山を中心に『近代日本思想史講座—第 2 巻』として『正統と異端』を刊行予定であったが未完に終わっているため, まとまった論考は出版されていない. 『正統と異端』の編集に際して開催されていた研究会のなかで丸山は, 闇斎学派に関する考察を正統と異端を巡る一つのケース・スタディとしている. このことから丸山の正統と異端についての思索が, 普遍的な図式を描こうとしていたことが伺える. 『丸山真男集 別集 第四巻』41-141 頁を参照.
- 38) 同上, 603 頁.
- 39) 同上, 605 頁.
- 40) 同上, 609 頁.
- 41) 同上, 617-620 頁.
- 42) 現代のクルアーン主義については, Aisha Y. Musa の著書 *Ḥadīth As Scripture* の第 4 章 *The Question of Authority in the Modern Period* や, 論文 “The Qur’anists” を参照.
- 43) ダニエル・フランクは *Search Scripture Well : Karaite Exegetes and the Origins of the Jewish Bible Commentary in the Islamic East* のまえがきにおいて, カライ派とラビ・ユダヤ教の論争は始めから, 多様な慣習が表出する法解釈の領域における權威を, 聖典に求めるか, 口伝律法に求めるかであったと指摘する.
- 44) その代表的な例として, クーミスィはアナンのことを ראש המסכילים (思慮深い者の頭) と呼んでいたが, 後に ראש הכסילים (無知な者の頭) と呼び変えていることが知られている. このことは「私の知識を頼みとするな」というアナンの言葉が, 後代に引き継がれていることを良く表している. 詳しくは Wilhelm Bacher の以下の論文を参照. “Qirqisani, the Karaite, and His Work on Jewish Sects.”

参考文献

一次資料

Yefet ben ‘Eli. *Commentary on Zechariah*. British Library, Oriental Collection 2401.

外国語文献

- Bacher, Wilhelm. “Qirqisani, the Karaite, and His Work on Jewish Sects.” *The Jewish Quarterly Review*, vol. 7, no. 4, 1895, pp. 687-710.
- Ben-Shammai, Haggai. “Daniel Al-Qūmisī.” *Encyclopaedia of Islam, Three*. edited by Fleet, Kate et al. vol. 2013-2. Brill, 2013, pp. 87-90.
- “DANIEL BEN MOSES AL-QŪMISĪ.” *Encyclopaedia Judaica*. edited by Fred ; Harkins, Angela Kim ; and Harkins, Franklin T. 2nd edition, vol. 5, Keter Publishing House, 2007, p. 428.

Frank, Daniel. *Search Scripture Well : Karaite Exegetes and the Origins of the Jewish Bible Commentary in the Islamic East*. Brill, 2004.

Khan, Geoffrey. *The Early Karaite Tradition of Hebrew Grammatical Thought : Including a Critical Edition, Translation and Analysis of the Diqduq of Ṭabū Yaaqūb Yūsuf Ibn Nūh on the Hagiographa*. Brill, 2000.

Musa, Aisha Y. *Ḥadīth As Scripture : Discussions on the Authority of Prophetic Traditions in Islam*. Palgrave Macmillan, 2008.

———. “The Qur’anists.” *Religion Compass*, vol. 4, no. 1, 2010, pp. 12-21.

Polliack, Meira. *Karaite Judaism : A Guide to Its History and Literary Sources*. Brill, 2003.

———. “Rethinking Karaism : between Judaism and Islam.” *AJS Review*, vol. 30, no. 1, 2006, pp. 67-93.

———. “Major Trends in Karaite Biblical Exegesis in the Tenth and Eleventh Centuries.” *Karaite Judaism : A Guide to Its History and Literary Sources*. Brill, 2003, pp. 363-413.

Poznanski, Samuel A. “Anan et Ses Ecrits.” *Revue des Études Juives*, vol. 44, 1902, pp. 161-187.

日本語文献

石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社, 1980.

市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社, 2009.

勝又悦子・勝又直也共著『生きるユダヤ教 カタチにならないものの強さ』教文館, 2016.

小岸昭「ハザール人」沼野充義編『ユダヤ学のすべて 新装版』, 56-57 頁, 新書館, 2009.

小辻誠祐『ユダヤ民族 —— その四千年の歩み ——』誠信書房, 1965.

ザハル, アブラム・レオン『ユダヤ人の歴史』滝川義人訳, 明石書店, 2003.

嶋田英晴『ユダヤ教徒に見る生き残り戦略』晃洋書房, 2015.

シュラキ, アンドレ『ユダヤ教の歴史』増田治子訳, 白水社, 1993.

ソロモン, ノーマン『一冊でわかる ユダヤ教』山我哲雄訳, 岩波書店, 2003.

滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版, 1994.

ランジュ, ニコラス・デ『ユダヤ教入門』柄谷凜訳, 岩波書店, 2002.

———『ユダヤ教とはなにか』柄谷凜訳, 青土社, 2004.

ディモント, マックス『ユダヤ人の歴史』平野和子・河合一充共訳, ミルトス, 1994.

丸山真男「闇斎学と闇斎学派」西順蔵, 阿部隆一, 丸山真男校注『山崎闇斎学派 日本史相大系 31』601-674 頁, 岩波書店, 1980.

———『丸山真男集別集—第 4 巻』東京女子大学丸山真男文庫編, 岩波書店, 2018.

ベンサソン, H・H『ユダヤ民族史 3 中世篇 I』村岡崇光訳, 石田友雄日本語版総編集, 六興出版, 1977.

ユダヤ大事典編纂委員会『ユダヤ大事典』荒地出版社,

2006.
ロス, シーセル『ユダヤ人の歴史』長谷川真・安積鋭

二共訳, みすず書房, 1966.

An Evaluation of Karaite Judaism within the Japanese Publications —— The Problematic of Orthodoxy and Legitimacy in Judaism under the Arab-Islamic World ——

Kazuya Solomon KANNO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This article investigates how Japanese publications portray a mediaeval Jewish denomination called Karaite Judaism or Karaism. Since scholars have considered Karaism as heresy or sect, it has been a peripheral subject among researchers, particularly in Japan. This paper engages with publications on Judaism written in or translated to Japanese. The review shows that most of them negatively portrayed Karaism solely as a heresy against conventional Rabbinic Judaism. Altering this dismissive attitude is essential to examine Karaism without fallacy.

This article applies the classification of religious tradition presented by Masao Maruyama, a Japanese political scientist, to reassess Karaism not with preconception but with integrity. Maruyama distinguishes orthodoxy and legitimacy that are both translated as “Seitō” (正統) in Japanese. By applying his definition of seitō, we could decently judge the denominational movements within Judaism under the Arab-Islamic power. Accordingly, while Rabbinism claimed its legitimacy by its oral tradition, Karaism maintained its orthodoxy by renouncing Rabbinic tradition and emphasising scripturalism. This article recommends not to describe Karaism as heresy and proposes a new approach to studying Karaite Judaism.